

研究開発

横浜ゴムは、「創意工夫」「応用実践」「複合化技術」をテーマに、材料開発から商品設計、試験・評価に至る多角的かつ総合的な研究開発を行い、ゴム高分子技術をはじめとするさまざまな技術と製品の可能性を追求してきました。

中でも命を運ぶタイヤ開発では、常に「人」の視点に立ち、安全性や走行性、快適性などあらゆる角度からの研究に鋭意取り組んでいます。横浜ゴムが有する総合タイヤテストコース「D-PARC(ディー・パーク)」「Tire Test Center of Asia」や、ウインタータイヤ用テストコース「北海道タイヤテストセンター」「Yokohama Test Center of Sweden」での走行テストで得られた膨大なデータは、瞬時に神奈川県平塚市の平塚製造所内にある研究開発センター「RADIC(ラディック)」に送られ、タイヤ性能の改善と次世代のタイヤ開発に活かされています。また、タイヤ以外の分野においても、既成概念にとらわれない斬新な発想と最先端の技術を駆使し、次世代を見据えた新素材の開発や商品設計を進めています。



近年の主な研究開発の成果

サステナブル資源を用いたゴム材料の研究開発で日本ゴム協会賞を受賞

2022年5月に、当社の技術者2名がサステナブル資源を用いたゴム材料の研究開発において、一般社団法人日本ゴム協会の「第34回日本ゴム協会賞」を受賞しました。本研究は、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO)の「超先端材料超高速開発基盤技術プロジェクト」における成果です。2022年1月にNEDOの「グリーンイノベーション基金事業/CO₂等を用いたプラスチック原料製造技術開発」に採択されており、引き続き技術開発を進めています。



一般社団法人日本ゴム協会 高藤拓会長(東京農工大学教授) (左)より表彰盾を授与された当社社員の白座操

タイヤ内のセンシング波形から摩耗状態を推定する新技術を開発

2022年4月、走行中のタイヤのセンシング波形から摩耗状態を検知する新技術を開発しました。タイヤの摩耗状態を“見える化”したことにより、安全性や経済性、環境負荷の低減などを考慮したタイヤメンテナンスが可能になります。今回の技術は、アルプスアルパイン(株)と共同開発中のタイヤ内面貼り付け型センサーから得られるセンシング波形を、独自の信号処理技術を用いて解析したものです。

当社は2021年2月に中長期的な技術開発ビジョン「Sensor Tire Technology Vision」を発表し、その活動の一環として異業種との実証実験を行っています。

